

ジョージ・ホーン『アダム・スミス博士への手紙』

林 直 樹

I はじめに

以下は、イングランド国教会牧師ホーン（George Horne, 1730-92）が「キリスト教徒と呼ばれる者の一人」の名で（つまり匿名で）出版した『アダム・スミス法学博士への手紙，その友人デイヴィッド・ヒュームの生と死，哲学に関して』（1777年）の全訳である。読解上の便宜のため，まず解題を付した。

底本には，Eighteenth Century Collections Online (ECCO) に収録されている，初版の電子リプリント（*A letter to Adam Smith LL. D. on the life, death, and philosophy of his friend David Hume Esq., Oxford, 1777*）を用いたが，必要に応じてGeorge Horne (Bishop of Norwich) and Samuel Jackson, *A letter to Adam Smith and Apology for the life and writings of David Hume, Esq.*, ed. J. V. Price, Routledge/Thoemmes Press, 1994 と *Early responses to Hume's life and reputation* (2nd ed., revised) ed. James Fieser, 2 vols., 2005所収の原典も参照した。ただし，Price編には原典本文に対する注釈が一切なく，他方Fieser編のそれも数箇所留まっており，必ずしも十分なものとは言えない。

II 解題

1 『手紙』の出版事情

『アダム・スミス博士への手紙』は出版当初から「非常な人気」を博し，1836年までに少

なくとも十五の版が現れたⁱ⁾。初版刊行と同年に早くも第二版，1784年に第四版，86年に第五版が出る。1799年には，キリスト教知識普及会の要望を受けて『手紙』の「新版」が公開された。さらに『ホーン著作集』諸版に収録されることによっても版を重ねるⁱⁱ⁾。

この『手紙』は，『デイヴィッド・ヒューム伝』*The life of David Hume, Esq.*, London, 1777への直接の応答として世に送り出されたものである。ヒュームは1776年4月18日に『自叙伝』*My own life*を書き上げ，同年8月25日に没したが，その後，スミスがヒュームの最期の態度について綴った一文を著し，当時下院議員を務めていた出版業者ストラーン（William Strahan, 1715-85）に宛てた手紙（同年11月9日付）の体裁での公開を図った。ストラーンは，この『ストラーンへの手紙』*Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq.*を先の『自叙伝』と合本し，『デイヴィッド・ヒューム伝』の題名を付して，翌年3月から4月にかけて3000部を出版するⁱⁱⁱ⁾。手紙においてスミスは，病床でルキアノス『死者の対話』を読みな

i) J. V. Price, 'Introduction,' *A letter to Adam Smith and Apology for the life and writings of David Hume*, p. xiii.

ii) James Fieser ed., *Early responses to Hume's life and reputation*, vol. 1, pp. 387-88.

iii) Price, *op. cit.*, p. ix; I. S. Ross, *The life of Adam Smith*, Clarendon Press, 1995, pp. 302-3（篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』シュプリンガー・フェアラーク東京，2000年，346～47ページ）。

がら冥界の河の渡し守カロン (Charon) との問答を思い描いたヒュームが、「自分は公衆の目を開くために努力してきた。あと数年、長生きできさえすれば、支配的な迷信の体系のいくつかが崩壊するのを見られて満足だろうに」と冗談を言いつつ、死に臨んでなお、周囲の人々を慮って陽気に振舞った旨を伝えた。そして、「私は、彼をいつも、その生前も没後も、人間的弱さの本性がおそらく許す限りにおいて、完全に賢明で有徳な人間の理念に最も近づいている人であると考えてきました」という自らのヒューム評を添えて、手紙を結んだ^{iv)}。このことが、ヒュームを不信心者、無神論者の象徴的存在と見なすイングランド国教会保守層の敵愾心をかき立てることになったのである。

かくして、国教会牧師ホーンがスミス批判の急先鋒として登場する。ホーンは、不信心者ヒュームという矮小化された像にスミスを強く結びつけることによって、両者をともに断罪しようとした。そのための方途として、彼は、アバディーンのマーシャル・カレッジにおいて道徳哲学教授と論理学教授を兼務する哲学者で、詩人でもあったビーティ (James Beattie,

1735-1803) の著作に少なからず依拠する。『手紙』の中のある箇所では、ヒュームの『自叙伝』が「私の人生の一時期で、もう一度過ごしたいといちばん思う時期を選ぶとすれば、私はこの晩年の時期を指し示しそうである」と語っている当の時期に^{v)}、実はその栄光を傷つけるような書物が現れており、ヒュームは心の平静を奪われていたはずだといった皮肉が述べられるが、その書物とは、ビーティ『真理の本質と不変性について』*An essay on the nature and immutability of truth*, Edinburgh, 1770を指すのであった。

2 ホーンという人物

ホーンは、1730年11月、ケント州メイドストーンに教区牧師の子として生まれた。彼はメイドストーン奨学生の資格を得て、46年3月にオックスフォード大学ユニヴァーシティ・カレッジに入学する。スネル奨学生のスミスがベイリオル・カレッジを離れたのは、その年の8月のことであった。1750年にモードリン・カレッジ特別研究員に選ばれた彼は、以後も大学に留まって学究生活を続け、神学者ハッチンスン (John Hutchinson, 1674-1737) の思想に影響されながら、そのヘブライ語根源説を批判的に検討するなどした。68年にはモードリン・カレッジ長、76年にはオックスフォード大学副総長に選出され (～80年)、同大学総長であると同時に大ブリテンの首相であったノース卿に接近する。これと併行して、71年から81年まで国王ジョージ三世付の常任牧師を務めた。81年にカンタベリー首席司祭、90年にノリッジ主教に叙任され、同年にモードリン・カレッジ長の職を退く。そして91年、かつて最晩年のヒュームも実践したバースへの湯治旅行の道中で発作に襲われたホーンは、二度と健康を回復せず、翌年1月にバースで没する。18世紀中に

iv) 'Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq.,' *The life of David Hume*, pp. 50, 62; *The correspondence of Adam Smith*, ed. E. C. Mossner and I. S. Ross, Oxford U. P., 1977, pp. 219, 221 (福鎌忠恕・齋藤繁雄訳『奇蹟論・迷信論・自殺論』法政大学出版局, 1985年, 134, 138ページ)。なお、スミスからウェタバーン (Alexander Wedderburn, 1733-1805) に宛てた手紙 (1776年8月14日付) には、ヒュームがスミスに対して「私は人々の目を開くために努力してきた。諸教会が閉鎖され、聖職者たちが失職するのを見る喜びを得るまでは〔カロンよ、〕もう少しだけ待っていてもらいたい」と語ったと書かれているから (*The correspondence of Adam Smith*, p. 204), おそらく実際の会話では、より激しい表現が用いられたのだろう。田中真晴『ウェーバー研究の諸論点』未来社, 2001年, 第二章「ヒュームの死とスミス」(初出1983年)を参照。

v) David Hume, 'My own life,' *The life of David Hume*, p. 31 (福鎌・齋藤訳, 150ページ)。

少なくとも五版を重ねた説教集『様々な主題や出来事に関する論集』*Discourses on several subjects and occasions*, 2 vols., Oxford, 1779の他、理神論的ないしは反三位一体を説くソツツイーニ主義的な立場を排撃した『不信心に関する手紙集』*Letters on infidelity*, Oxford, 1784や『プリーストリ博士への手紙』*Letter to the Reverend Doctor Priestley*, Oxford, 1787など、彼は国教会保守層を代表する牧師にふさわしい著作を数多く残した^{vi)}。

ホーンの没後、オックスフォードにおける学生時代以来の友人であったジョーンズ(William Jones of Nayland, 1726-1800)が『先のノリッジ主教ジョージ・ホーン神学博士の生涯、研究、著作の記録』*Memoirs of the life, studies, and writings of the right Reverend George Horne, D. D. late lord bishop of Norwich*, London, 1795を公刊した。ジョーンズは、その著書一般が「アメリカ独立戦争、さらにはフランス革命に起因する、体制への脅威」の最中に「広範な読者層」を獲得したことから、ニューマン(John Henry Newman, 1801-90)の手でのちにオックスフォード信仰復興運動の先駆者に位置づけられる^{vii)}。彼による詳細な伝記はホーンの読書歴にも触れているが、それによれば、18世紀初頭に活躍した宣誓拒否者レズリ(Charles Leslie, 1650-1722)の『神学論集』*The theological works of the Reverend Mr. Charles Leslie*, 2 vols., London, 1721に出会ったことが、若き日のホーンとジョーンズ自身にとって「幸運なことであった」^{viii)}。

私は、レズリ氏が『罪と異端の歴史』と題した著作[[『神学論集』上巻所収]を読んだホーン氏の驚きがどれほどのものであったか、それを決して忘れるはしないだろう。その著作は、世界の始まりの前に、それら(罪と異端)がいかにして天使たちの間に創造されたかを、聖書に見出される暗示の数々から説明するものであった。「これは」と、ホーン氏は言った。「まるで人間が天国をのぞき込んで、ルシファー[墮天使]の反抗のとき、そこで何が起こったかを見ようとしたかのようだ」^{ix)}。

ほどなくして、ホーンはレズリの政治著作に目を移したという。

彼が『リハーサル』と題された定期刊行紙に出会うまで、長くはかからなかった。それはアン女王の時代、不信心者や非国教徒が最もせわしなかった頃に、レズリが出版していたものである。その頃、不信心者や非国教徒は、(彼ら自身が言うには)既成教会の崩壊に大きな期待を懐いていた。この新聞は、大胆にも、彼らの議論すべてと対決した。シドニーとロックを切り裂き、共和主義の諸原理に論駁し、その党派のあらゆる企てをあらわにした。[...]時に(1750年)、六巻本で再版されたばかりであったこの非凡な作品が、オックスフォードのホーン氏の手に渡り、変わらぬ好奇心と注目をもって検討されたのである。彼自身の言によれば、それを読んで大いに教訓を得たという。天稟と眼識を具えた一人の人物に多大な満足を与えたこの作品は、他の大勢の人々にも、同じ影響を及ぼしたに違いない。今日の私たちの間には忠誠心を見出すことができ、そのおかげで国が近頃までたいへん幸福に保たれてきたわけだが、その忠誠心は、当時レズリ氏が播いた種のいくつ

vi) 'Horne (George),' in *A new and general biographical dictionary*, new ed., 15 vols., London, 1798, vol. 8; Nigel Aston, 'Horne, George (1730-1792),' in *Oxford dictionary of national biography*.

vii) G. M. Ditchfield, 'Jones, William [known as William Jones of Nayland] (1726-1800),' in *ODNB*.

viii) William Jones, *Memoirs*, p. 69.

ix) *Ibid.*, p. 70.

かから成長した、というのは、大いにありうることであろう^{x)}。

アン女王時代の論客レズリがホーンに与えた思想的影響は、ずいぶん大きなものであったことが窺えよう。

レズリは元来アイルランドの牧師であったが、名誉革命の際に新国王と新体制に対する宣誓を拒否して聖職を追われ、以後、フランスのサンジェルマン宮殿とブリテンのジャコバイトとの橋渡し役を務めながら、反ウィッグ、反非国教徒、反理神論の論陣を張った。高教会派トーリのスポークスマンとして、彼は1704年8月に手紙新聞『リハーサル』*Rehearsal*の定期発行を始め、ウィッグのタッチン (John Tutchin, c. 1661-1707) が発行する『オブザベーター』*Observer*紙と、穏健派トーリを支えるデフォー (Daniel Defoe, c. 1660-1731) の『レビュー』*Review*紙との間で、三つ巴と呼びうる論争を展開する^{xi)}。ホーンあるいはジョーンズは、ウィッグ寡頭政の終焉と七年戦争を経験したのちに目まぐるしく移り変わっていく自らの時代を、そうした寡頭政成立以前の、激しい社会変動の続いた「アン女王の時代」に重ね合わせていたのではないか。そして、アメリカ問題をはじめ、まさに現前しつつある大規模な変化の兆候に対して読者公衆が懐く漠然とした不安に効果的に訴えかける術を、若き日以来親しんできたレズリという高教会派トーリの論客のうちに求めたのではなかったか。

3 スミスの反応

『アダム・スミス伝』の著者レーは、要するに「ヒュームが本当に寛容であるか、思いやりを持っているか、善良か、慈愛に富むか、ある

いは優しければ、神についての知識やその父らしい庇護についての心地よい信条を人類の胸のうちから抹消しようなどと考えるわけがないから、ヒュームのような周知の意見を懐く人物が、スミスが描いたような善良で有徳な人間でありうるはずがない」と、ホーンは主張したのだと言うが^{xii)}、その上で、この『手紙』に対するスミスの態度について、次のように述べている。

この攻撃に対して、スミスは決して返答を書かなかったし、それについての関心を公にすることも、いかなるかたちであれ、行わなかった。だが彼は、「自らは無実だとわかっている罪のために非難された者は、全く健康だと感じているときに病気だと言われた者と同じく、何ら不安を感じるはずがない」というホーン主教手製の霊妙な格率に同意せぬだけの、真の人間本性を、持ち合わせていた^{xiii)}。

スミスは確かに、公の場では『手紙』の黙殺を続けたようであるが、1780年10月26日付の私信では、次のような嘆息をもらしている。

私たちの友、故ヒューム氏の死についてたまたま書いた、まさに無害と私には思われるたった一つの文章によって、私は、自分が『国富論』によって] 大ブリテンの全商業体系に加えたかなり激しい攻撃の、十倍もの罵りを受けたのです^{xiv)}。

そして、最晩年に仕上げた『道徳感情論』第六版に、スミスは以下の叙述を追加した。

xii) John Rae, *Life of Adam Smith*, Augustus M. Kelly, 1965, p. 312 (大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店, 1972年, 393ページ)。

xiii) *Ibid.*, p. 313 (大内訳, 394ページ)。

xiv) *The correspondence of Adam Smith*, p. 251. オランダの史家ホルト (Andres Holt, 1729-84) 宛の手紙。

x) *Ibid.*, p. 71.

xi) アン女王時代の各党派による世論操作の手法については、例えば J. A. Downie, *Robert Harley and the press*, Cambridge U. P., 1979を参照。

最も普通の〔心の〕恒常性を有している人々は、確かに、実に頻繁に社会に流布されるような、そしてそれ自体の不合理と虚偽とによって数週間か数日を経つうちに間違いなく消え去るような、愚かな作り話を軽蔑することを、容易に学習する。だが、普通以上の恒常性を持っていたとしても、罪のない者が、偽りではあるが深刻な罪のなすりつけによって衝撃を受けるばかりか、非常に激しく傷つけられることは、しばしばある。とりわけ、不運にも、そのなすりつけにもっともらしいという感じを与えるような何らかの諸事情のせいでそれが支えられることになれば、そうである。彼は自分を卑下して、誰もが、そういう罪を犯しうると思うほどに自分の人格を卑しく見なしていると感じてしまう。自らの無実を完全に自覚していても、なすりつけそのものが、彼自身の想像の中においてすら、その人格上にしばしば不面目と不名誉の影を投げかけるように思われる。それほどひどいというのに、応酬がしばしば不適切で、ときには不可能でさえあるような侵害に対する、彼の正当な憤慨も、それ自体としてたいへん苦痛な情感である。満たされることのない激しい怒りほど、人間の胸を強く苦しめるものはない^{xv)}。

上の一節の文脈に関しては、様々な解釈が可能であろう。だが、レーも述べている「真の人間本性」がまさしくこのようなものであるとすれば、最晩年のスミスの胸中に、信仰心ゆえか興味本位ゆえか、ともかく外部の人の支持を受けて次々と版を重ねていく『手紙』に対する、満たしようのない静かな怒りが宿っていたとしても、不思議はない。

Ⅲ ジョージ・ホーン『アダム・スミス博士への手紙』

凡例

- ①原文イタリック表記は〈 〉で、大文字表記は《 》で括った。
- ②ホーンによる原注はa, b, c……で示し、訳注は1, 2, 3……で示した。
- ③訳者による補足、人物の全名や生没年等の情報は、[]内に示した。
- ④引用書の邦訳はできるかぎり参照したが、部分的に改訳を施した場合もある。その旨を逐次指摘してはいない点、ご寛恕願う。

アダム・スミス法学博士への手紙

その友人デイヴィッド・ヒュームの生と死、
哲学に関して

著：キリスト教徒と呼ばれる者の一人

朧気ながら進み行く、闇夜の寂寥の下、
ディースの虚ろな館と抜け殻の王国を通して。

ウェルギリウス¹⁾

緒言

今語りかけている人物の名を知ることは、《スミス》博士にとっても、読者の方、つまりあなたにとっても、大切ではありません。あなたが名を知らないでいるせいで、その心がいずれか一方に偏するということはないでしょう。これより後のページに見られる所見の数々は、それゆえ、真でも偽でもないものでして、なぜなら、私がそれらを案出したからです。ですが、私がそれらを案出したのは、それらが真実であると考えているからに他なりません。読み、考え、そしてあなた自身で決めてください。何の満足も得られなければ、冊子を火中に放り込んで²⁾、シリング貨一枚を失くしたことを（ただし哲学者のごとく、穏健さをもって）後悔して

xv) Smith, *The theory of moral sentiments*, ed. Raphael and Macfie, p. 119 (水田訳 (上) 385～86ページ)。

ください。そして、同じ具合にまた別のシリング貨を失わぬよう、用心することです。逆に〈万一〉、あなたが満足を見出したなら（よろしければ、存分に、そうしていただきたいのですが）、そうしてあなたに伝えられた事柄を、他人に伝えることを怠らないでください。どこかへ行くときには必ず、私のことを大いに語り、親類や知人に私のことを紹介してください。宗教の敵は目覚めています。宗教の友を眠らせたままにしないようにしてください。

もっと長い著作に、私はするつもりでした。しかし、《ヒューム》氏の『自叙伝』の学識ある編者〔ストラーン (William Strahan, 1715-85)〕と同じように、できるだけ迅速に「公衆の好奇心の切望」を「満たす」必要に迫られたのです³⁾。《神》を信じる彼らは、自分のために何としても言わねばならないことを、切実に聞きたがっていることでしょう。そしてもしこのことが果たされるならば、あなたがこれ以上悩まされることが、どうしてありえましょう。その観測のすべてについて、私は《ヴォルテール》氏に全く同意しません。ですが、彼に反対することのできない点が、ただ一つだけあります。「私は言った、だからそれに耐え忍ぶのだ」と、かの小英雄は嘆くのです。「多くの本の欠陥は長すぎるのだ、と」。書き上げたものを見直してみましたが、もう一行を付け足す理由を見つけないことが、私にはどうしてもできません。

もし、自分の姿を、自分がいちばんよく弁えている理由のためにこうして〈秘匿〉することを選んでいなかったとしたら、私はきっと自分の肖像画を描かせていたでしょうし、《ヒューム》氏のそれと同様に生き生きとして感じのよい私のタイトルページに、目を向けさせようと努力していたことでしょう。事実、出版元は私に対して、上手くやるのならそうするのがいっそう確かな手段だろうし、「それに、あなたもご存じの通り、われわれはあと六ペンス請求で

きたでしょうな」と、言ったのです⁴⁾。

手紙

先頃あなたは、ある哲学者を末永く保存するための仕事をなさいました。彼の〈身体〉を保存するための、とあえて言いましょう。身体以外の部分に関しては、あなたも彼も、何らかの思想をつね日頃から抱き続けてこられたとは思えません。そうでなかったなら、それはあなたの関心ないし注意を、わずかでも引きつけることになっていたに違いないのです。『道徳感情論』の中で⁵⁾、魂の實在および不滅の信念は、役に立たないとしても、無害であると考える人もいることでしょう。しかし、紳士はみな、自分自身の務めを最もよく理解しているものなのです。

この、つねに記憶に留めておくべき〈保存〉作業は、あなたがストラーン氏に宛てた興味深い手紙の中で行われていますが、それに関するいくつかの明快な所見を、自由かつ簡明なやり方で受け入れ、名のわからない文通相手の顔を立ててはもらえないでしょうか。われらが哲学者の自叙伝についても、のちほど、同じく考慮に入れるとしましょう。

善良な博士よ、私を信頼してください。私は頑固者ではありませんし、狂信者でも、人文学の敵でもありません——〈私もアルカディアの住人〉——私もヒューム氏と同じく、個人的にはキケロやウェルギリウスの豊かな食事を幾度も嗜んできました⁶⁾。（おそらく、同様の機会にヒューム氏が述べたように、「その問題について、自分で判断を下すべきではない」のです⁷⁾、天稟の産物、作文の美に対して、よりいっそう鋭敏な嗜好を身につけているという者は、ほとんどおりません。ですから私には、あなたの友人の文筆上の評判を害する意図も力能も、ほとんどありません。私は彼の著作のいくつかから大きな快樂を受け取ってきましたし、彼の『イングランド史』を、従来、〈物体と運

動〉を取り扱ったすばらしい労作と見なしてきました。しかし、ある男が害心を抱くなら、その男が〈小利口者〉だとして残念がる分別が公衆にはいつも具わっているということに、あなたは気づいておられるに違いありません。

同様に私が、自分の作文において、あの無類の《シェイクスピア》が〈生まれながらの人情〉と呼んだものに大部分を割いていると語りましても⁷⁾、私が自惚れているとはお思いにならないよう、お願いいたします。悪意、すなわち憎しみとは何かを知らずにいられたならよかったのです。私はいつ何時でも、そうすることのできる場所であらば、敬意と良心をもって進んで賛美する心構えであります。あなたが説いておられるように、きっとデイヴィッドは社交的で人当たりのよい、陽気な気質を具えた人物で、面白い話をし、「お気に入りのゲームのホイスト」でよく遊んでいたことでしょう⁸⁾。《塗装工のジョン》[エイトケン (James Aitken, 1752-77) の通称] が同じことをしていたかどうかは知りません⁹⁾。ですが、その想定におかしなところは少しもありません。彼がそうしなかったとしても、そうすることはできました——博士、怒らないで——傷つけるつもりはありませんから。ですから私には、王国中の海軍工廠を燃やすという彼の奇妙な空想を容認することが、絶対にできなかったということを、こうして暗にお示しただけなのです。

《ヒューム》氏の〈哲学的見解〉に関して、「人々はきっと、様々に判断することだろう」とあなたは見ておられます¹⁰⁾。人々には、確かに、そうする自由があるでしょう。というのも、著者自身が同じことをしたのでから。時として彼は、間違いなく、自分の哲学的見解を独創的、深遠、繊細、優雅であると考え、自分の学問的名声を、世界の隅々にまで普及させるつもりでおりました。しかし、別の時には、彼はかなり異なった判断を下しております。事実、相当に異なっているのです。彼は言います、

「私は夕食をとり、バックギャモンで遊び、友人と会話をし、楽しむ。そして三、四時間の気晴らしの後、私はそれらの思索に戻ろうとするが、その時には、それらは〈冷めた〉、〈無理な〉、〈滑稽な〉もののように見えるので、もはや、そうした思索に入ろうという気持ちにはなれないのである」と¹¹⁾。さて、《ヒューム》氏の哲学について、彼がそれについて夕食後に判断を下したように、私が夕食前に判断を下すことしかお許しただけでないということでしたら、これ以上この問題について言い争うのはよみましょう。私の望みは、できることなら、一日のいつ何時の瞑想にも持ちこたえるような、一つの思想体系を持ちたいということに尽きます。さもなければ人は、ある者は午前、別の者は午後に跨るような形而上の回転木馬の支柱を保守し続けるという犠牲を、払わねばならないからです。

私と同じく（この世に生きる誰よりも）見解の自由の友であられるところのあなたには申し訳ないのですが、つまるところ私には、《ヒューム》氏の哲学的思索について、人々がたいへん〈様々に〉判断するということが、かなり遺憾に思えるのです。と言いますのは、それらの思索は、真理と慰安、救済と不滅、死後の状態、摂理といった観念のすべてを、そして神の实在の観念すら、この世から放逐しようと企むものでありますから、その著者の生前、酒を飲みながら彼が冗談を飛ばすのを聞いたがつたことも以前はあったかもしれないとはいえ、今では、それらについて、われわれが同一の思いを抱くことは断じてありえません。死に臨んだ彼が、こういう性質や傾向をもった論考を自分のお気に入りの放言集に含めるのをよした、とあなたから聞かされておりましたなら、私は十分、満足していたはずです。

と言いますのも——（博士、この問題に関して、よろしければもう少し、あなたのそばに寄らせてください——ご懸念には及びません——

私の名前はBで始まっておりませんので——)⁹⁾、〈あなた〉は、神や、報償と処罰をめぐる死後の状態などといったものは本当に存在しないと、確信しておられるのでしょうか。そして、〈われわれ〉にそう確信させることもおできになるのでしょうか。そうなのでしたら、まったくもって結構なことです。〈では〉、われわれが最期の時間に《ルキアノス》を読み、《ホイスト》で遊び、《カロン》とその舟でおどけるのをお許しください¹⁰⁾。われらが兄弟の哲学者ら、草原の子牛ら、さらに荒野の驢馬らのごとく、どこまでも、できるだけ愚かしく、できるだけ無神経に死なせてやってください。しかし——仮に、その《ようだ》としましたら——ほぼ間違いなく、そう《である》のですが——、《宗教》と名のつくすべてのものに対する、救いがたい反感にとりつかれていたように思える者の〈性格〉と〈行い〉を「完全に賢明で有徳」と見¹¹⁾、それを支持することが、あなたにとってふさわしいことでしょうか。人々の宗教精神を爆破し、抑圧し、根絶するために——彼がそれをやりおおせていれば、まさしくそうなったでしょう——力をふりしぼった者は、もう記憶に留めておかれないでよいのでしょうか。この種の性格の持ち主が〈よい仲間〉で、〈トランプカード〉の操り方を知っているからといって、われわれがその性格を甘んじて受け入れる羽目になり、さらにはそれと恋に落ちるだろうと、あなたはお考えなのですか。時代は低俗になっておりますが、このような扱いに憤るだけの品性が、なお残されていることを、心から希望するものであります。

あなたは、《ヒューム》氏が自分自身と老《カロン》の間で取り交わされると想像した、いくつかの〈愉快的着想〉で、われわれを楽しませようと努めておられます。哲学者は老紳士に「自分は公衆の目を開こうと努めてきました」と述べますし、また彼は「新版のために自分の著作を改訂しているところ」で、そのこと

から大事が期待できるだろう、と述べています。つまり「あと数年、長生きできさえすれば（そしてそれが、彼がそうするのを望む唯一の理由なのです）、支配的な〈迷信〉の体系のいくつかが崩壊するのを見られて自分は満足だろうに」というわけです¹²⁾。

《ヒューム》氏の語彙における《迷信》の語が何を意味しているか、われわれはみな知っていますし、その名辞のもとで、彼の矢がどの宗教に対して向けられているかも、知っています。ですが《スミス》博士、約束の時にわれわれをこの世から召し出す者が《カロン》であると、あなたは信じておられるのですか。あるいは、われわれにそう信じさせようとなさっておいでなのですか。《彼》[主]がわれわれをこの世から召し出すのでなければ、誰が、われわれをこの世に送り込むのでしょうか。《彼》に向けられるべきもので、いかなる意味と妥当性においても《彼》に対してのみ向けられうる祈りの変奏曲を、ここであなたにお示ししましょう。——それはこうなります——

「〔主〕よ、私には、生きることを望む理由が一つだけございます。そうするのをお許しください、お願いですから、あと少しの間、汝の息子がその植えつけのために天から降下したところのあの信条を私の形而上学を用いてひっくり返し、汝にまつわる知識や愛をこの地上から根絶するという私の企てが、成功するのを目にするまでは」。

ここには修辭的な比喩表現などないですし、過大表現も、誇張ありません。事はまさにこの通りなのです。世に憚ることなく私は訴えます。あなたに対して、そして《ヒューム》氏の著作を読解できるすべての人々に対して、彼の〈哲学〉と呼ばれているものの趣旨は、平明かつ正直な英語を用いれば、このようにならないか、と。その普及のためにのみ、彼は生きることを望みました。そしてその〈哲学〉と呼ばれているものに関して、あなたは冷静に「人々は

様々に判断することだろうし、自分の見解との偶然の一致不一致に応じて、各々でそれらを是認したり、非難したりすることであろう」と述べ、満足なさっているのです⁹⁾。こうした場合、われわれはごく自然に『第一哲学』の著者のことを想い起こしますが¹⁰⁾、その著者も同じく〈公衆の目を開く〉ことに従事していました——彼はそうしたのですが、公衆が自分たちでなしうると悟った発見は唯一、自分たちが《裸である》、というものでした¹¹⁾。

あなたは、われらが哲学者の振舞いの〈優しさ〉、〈善良な人柄〉、〈思いやり〉、〈寛容〉、〈慈愛〉について、多くを語っておられます。あな悲しや、それらはみないったいどこへ去ってしまっていたのでしょうか。これらの豊穡で永続的な諸源泉から引き出される、神とその定めにつわる知識の痕跡のすべてを、神の情け深い摂理や父らしい庇護をめぐる信条のすべてを、現在ないしは将来に神の恩寵を享受するという望みのすべてを、神への愛と神に捧げる同胞愛のすべてを、苦難の下での堪忍のすべてを、悲しみの中での慰めのすべてを消し去ろうとして、実にしばしば、彼が穏やかに、そしてゆっくりと腰を下ろしたときには。善良な一人の人間が、形而上学的な呪文の力を用い、一瞬のうちに天から太陽を消滅させ、地上のあらゆる泉を干上がらせることが自分にはできると考え、実行しようとしたというのでしょうか。——《キケロ》は、われわれがみな、そこに向けて旅をしているところの国について、おぼろげな見識しか有してはおりませんでした。しかし、来世についての最も不完全で曖昧な見通しなら何でも喜ばしいものでしたから、《キケロ》は、誰一人それを自分から奪い取ってはならぬと声明したのです⁹⁾。そして確かに、《キケロ》は《ヒューム》と同じく哲学者でした。おお、《ヒューム》を照らす光を見たとしても、彼は目を閉じようとはしなかったでしょう。同一の杯を差し出されても、彼は、口をつけずにそれをはねつけよ

うとはしなかったことでしょう！

おそらくのところ現代の懐疑論者らは無知であり、《神》を信じず、不滅の希望も持たないがゆえに、人間的生活の惨めさはしばしば耐えがたいものとなっていよう。だが私は、彼らが全体的かつ不可抗的愚劣の状態、すなわち人間の心情や事情に関する徹底した不案内者の状態にあると、想定してよいだろうか。そうした想定ゆえに、彼らが私に感謝するということはまずなかろう。しかし私は、このように想定せねばならぬし、さもなければ、人間のうちで最も残酷で、最も不実で、最も放蕩なのが彼らだと、考えざるをえないのである。偉人と称する者どもによって持ち上げられ、人生の形式に支配され、虚栄にとらわれ、世辞に満たされ、務めの喧騒すなわち愚行の変転の只中で浪費させられるのだから、彼らはおそらく、宗教の慰めをほとんど必要としてはおらず、それを味わうこともほとんどない。しかしながら、生涯の孤独な諸場面には、救いがたい苦悶とともにやせ衰え、きわめて鋭い失望の針に貫かれ、友人たちに先立たれ、貧困に意気を挫かれ、病に苦しめられ、抑圧者に鞭打たれる、正直で繊細な心情が数多く見られる。摂理への信頼、そして将来報いられるという望みだけが、その心を絶望の苦悩から守ることができる。彼らは、冒瀆的な手で、惨めな者たちのこの最後の避難所を侵犯し、不運、悪意、専制による破壊の数々を耐え抜いてきた唯一の慰安の場を、奪い去ろうというのか。これまで、彼らの忌まわしい教義の影響力が、徳ある隠棲の静穏をかき乱し、人間的苦痛をめぐる憂鬱をいっそう深め、墓場の恐怖をいっそう大きくしたことがあったか。このことが、数多くの事例において生じたなどということが、果たしてありうるか。このことが、たった一つの事例において生じたということも、確かなのか。

——人類に対する裏切り者、人間の魂の殺傷者よ、汝らはそれについて、自らの心情にどう返答しようというのか！この考察が、きわめて鋭い自責の念を呼び起こさず、魂の苦しみを求めさせないというのなら、間違いなく、お前たちの寛容さの輝きはすべて永遠に滅び去るのだ——忠告は無駄なことだが。こうしたことはみな、しばしばお前たちの心に浮かぶこともあったに違いないが、全くもって不真面目にも、それを受けつけようとはしてこなかったに相違ない。お前たちの虚栄心に訴えかければ、目下の論点を強化できるだろう。ひょっとしたら何らかの印象を残すことができるかもしれない。だが、《仁愛》ないし《寛容》の諸原理をめぐる訴えかけることは、汝らが理解しないか、あるいは理解しようとしめない言葉で語りかけることだ。不合理、無知、公正の欠如を自覚することからくる恥に関して、汝らは、自分たちがその感覚に左右されないことをはるか昔に証明している。——だが、真実を愛する者たちを落胆させないようにせよ。無神論は長く存続しえず、それが一般に広まる危険も大きくはない。幾人かの派手な人物の影響が、無神論を過度に流行させてきたのである。思想のない、放蕩な時代において、それを成し遂げるのに困難はないのだ。しかしながら、人々が真摯な反省の力能を回復したとき、彼らは、無神論が恐るべき抜け殻だと悟るだろう。そして、その心は嬉々として、かつ熱烈に、昔ながらの愛らしさを取り戻すであろう。われわれは一つの事柄を確実に知っている。すなわち、懷疑的かつ形而上学的な諸体系の流行は、もはや終わっているのだ。そのような不自然な作品、無情で愚劣なる心情の卑しむべき発露は、落ち着きのなさを非凡な活動と取り違え、揚げ足取りを知性の賢明さと取り違えているが、他の怪物どもと同じく、その特異性のおかげでしばらくは気に入られるだろう。だが、

その魔力はすぐに消え失せる。そして後代の人々は、自分の先祖がそのように戯けたものに欺かれ、惑わされていたと聞いて、驚嘆するであろう¹²⁾。

あなたは、前段落をお読みになったことがありますね¹³⁾。ですが、この『手紙』は、それを読んだことのない大勢の人々の手許に届くかもしれません。これは《ヒューム》氏の賞賛者たちに対する警鐘です。最後のらっばが吹かれるまで¹⁴⁾、それは彼らの耳元で鳴らされ続けることでしょう。

ここで、あなたに二、三の質問をさせていたでもいいのでしょうか。われらが哲学者は完全に平静かつ気楽に生き、かつ亡くなると、こんなに慌てて騒ぎ立て、「公衆の切望」とやらを満たし¹⁵⁾、そう納得させるために、こんなに熱くなっておられるのは、いったい全体、なぜなのでしょう。彼が時折、そうであったと思われるほど平静かつ気楽ではなかったかもしれないという疑惑が、《スコットランド》では見られたのでしょうか。彼に反対して書かれた何らかの《書物》で、彼の体系に衝撃を与えて粉々の瓦礫の山にし、その成功と栄光が彼の心を傷つけ、彼の健康に影響を及ぼしたと考えられるようなものが、何か存在したのでしょうか。たまたまその人物の〈名前〉が口に出されると、彼がつねに激情と罵声の虜になってしまうため、友人たちが彼の前でそれに言及するのを憚り、彼に紹介される客人全員にも、そうしてはならないと警告していたような《著述家》が、誰かいたのでしょうか¹⁶⁾。それだから、彼の評判を傷つける書物はまるで何も書かれなかったかのように、彼が自らの哲学的名声の成長や高まりは全くもって確実だと自己を弁護し、あなたもまた彼をそのように弁護することが必要ないしは得策だと、考えつかれたのでしょうか。《ダゴン》の倒壊を誤魔化することのほうが、〈彼を再びその胸の上に据える〉

ことよりもいっそう容易だと¹⁵⁾、判断されたのでしょうか。私は〈南〉ブリテン人ですから、反対の方角でこれまでに生じていることに通じてはおりません。こうしたことの模様を、あなたがわれわれに知らせてくださってもよいでしょう。そしてまた、〈仁愛〉と〈慈愛〉、〈知恵〉と〈徳〉をめぐる偉大な作品が、魂の《滅び》の証明を企てた論考や、《自殺》の奨めを企てた別の論考の出版をもって有終の美を飾られる際には、それを理由にきつと、現世代とすべての将来世代が、〈優しく〉かつ〈愛すべき〉その著者の名を祝福する、いや呪うことでしょう。

博士、大体のところ、あなたの意図は申し分ないですね。しかし、今回は成功なさらないだろうと、私は思います。《デイヴィッド・ヒューム》の例を用いて、あなたはわれわれを説得しようとなさいました。その無神論は、低俗な精神の持ち主にとってのただ一つの強壮剤ですし、死の恐怖に対する適切な中和剤です。しかし確かなのは、人生においてかくもその才能を誤用した友人、死に際に《ルキアノス》、《ホイスト》、《カロン》で遊ぶ友人を充足感とともに想い起こすことができる者は、廃墟と化した《バビロン》に微笑みかけるかもしれず、《リスボン》を破壊した地震を好ましい出来事と思うかもしれない¹⁶⁾。さらには、紅海での転覆について、非情な《パロ》に祝意を表するかもしれない¹⁷⁾、ということなのです。そうした状況での戯れは、まさしく

最も厳しい災禍の只中で笑い声を上げる、気紛れな狂気¹⁸⁾

に他なりません。偽りの哲学が人間の心情に及ぼす有害で厄介な諸影響を、悟ろうではありませんか。われわれは、この最も嘆かわしい《ヒューム》氏の例について、その諸影響を観想するだけでよいのです。

このような言い方は粗暴であるとお思になるかもしれませんが、有益ではあります。旅立った魂には、地上で進行中の事柄について、いくらかの知識が具わっているものとしましょう。その場合、彼がもはや望んでいない影響をその著作が人類に及ぼさないようにするために、表現の力強さと訓戒の温かさによって最大の貢献を行う人物は、あなたのご友人によって、真の奉仕者と見なされることでしょう。自己を欺いてはならず、他者に欺かれてもなりません。それは永遠の《真理》の声であり、それは大声で嘆き、あなたと私、そして全世界に語ります——〈神の子を信ずる者は不朽の生命を持つ。神の子を信じぬ者は、生命を知ることなく、神の怒りを被り続けるであろう〉と¹⁾。

〈この世で〉神〈無しに〉過ごした一生を終えるに際してのヒューム氏の振舞いと引き比べるため、あなたや公衆に、造物主と贖い主に奉仕しながら日々を送った真の学者で、分別を具えた、称賛すべき《フッカー》[Richard Hooker, 1554–1600] の、最期の感情の数々をお示しすることをお許しください。

『教会組織』の著者は¹⁹⁾、したがって、息を引き取る直前にこのように述べました——

これまで生きて、私はこの世が不安から成り立っているのを目にしてきました。そして私は、この世を離れるための準備を長らく続けてまいりましたし、もう間もなくであることを感じる、《神》への自己弁明というかの畏れ多き時間のための慰安の品を、長らく収集してまいりました。彼の恩寵を受け、私は若年に彼を愛し、老年に彼を畏れ、また彼とすべての人々に対して心からの誠実さを持つように努めてまいったのですが、しかし汝、すなわち主よ、私の過ちを記録しておられるほどに御身が厳格ならば、それに耐えられる者が誰かおりましたや。ですから主よ、私が滅したときには、どうか慈悲をお示しくださ

い。私は自分の正しさを主張しているのではありません。悔悛した罪人のための許しを得ようとして亡くなった彼〔イエス〕の功徳をもって、私の不当さの赦免を、どうか、お願いしたいのです。私は死をもって御身に奉仕するのですから、主よ、どうかそれを恐ろしいものとはなさらないでください。あとは思うままにどうぞ。私は従います。おお、主よ、私の意志ではなく、御身の意志を行わしめてください！……《神》は毎日の嘆願を聞いてくださいました。それは、私がすべての人々との間に安らぎを得、彼が私との間に安らぎを得ていたからです。そうした神聖な確信からくる内なる喜びを私は感じていますが、それは、この世が私に与えることも、私から奪うこともできないものです。私の誠実さがこの証をもたらしますし、この証が、死にまつわる様々な思いを喜ばしいものとするのです。私は生きて、教会にもっと奉仕したいと思いますが、それは望めません。私の日々は過ぎ去りました、戻らぬ影のように。

フッカーの優れた伝記作者は、こう付け加えています——「彼はさらに話をしようとしたが、彼の靈魂がそうさせなかった。活力と死とが短く争った後、彼の最期の呼吸は静かに終止符を打たれたと見え、そうして彼は眠りについた……今や彼は、アブラハムの懷に抱かれたラザロのごとく横たわっているように思える²⁰⁾。最も輝ける族長や使徒の一団、最も高貴なる殉教者や証聖者の一軍とともに、この最も学識豊かで、最も謙虚で、かつ最も神聖な人物も同様に甦り、永遠の平穩を受け取るであろうときまでは、そして、一般のキリスト教徒が与るよりもいっそう高次の名誉とともに彼がそうするであろうときまでは、このあたりで幕引きとさせていただきます²¹⁾」。

《スミス》博士は、今後、自分の出発の刻限が到来するときに、自分に最もふさわしい信仰

者、すなわち不信心者の例を手本とすることでしよう。私は、自分自身が次のように叫ばずにはいられないのがわかっていますから、そのようにするつもりのない読者の〈頭〉や〈心情〉のことを、あまりよくは思わない旨、白状しておきます——

〈正しき者として《私を》死なせてください、そして、彼のごとき最期を《私に》お許しください！〉

私は、

あなたの、たいへん忠実で

その幸福を願う、

卑しい僕であるところの、

《キリスト教徒》と呼ばれる者の一人です。

追伸

この小論が、小さいものであるおかげで、大冊を読み通す暇も、そうしたいという気も持たず、さらに《ヒューム》氏の哲学体系とはいかなるものかについて知りたいとも思わない多数の人々によって通読されるということは、あるかもしれないどころか、大いにあると考えられますから、私はこの場に、その体系を構成する諸学説についての、短く、しかしわかりやすい要約を付け加えておきたいと思います。この要約は、何年か前に、学識ある一人の紳士が自分の娯楽のために書き上げたものでして、われらが哲学者の諸著作中の、そういう諸学説が見出される各所に対し、適切な言及がなされています。それを理由にこの作成者が《ヒューム》氏から感謝されたとは一度も聞いておりませんが、彼や彼の友人が、その忠実さや正確さを問題にしたことも、なかったはず²²⁾。

ヒューム氏の、形而上学的ならびに道徳的諸学説の要約

魂について

人間の魂は、この瞬間に、先刻のものと同一ではない。われわれはそれが何であるかを知らない。それは単一ではなく、多数のものからなる。それは全く何ものでもない。

この魂においては、思慮ある被造物を始終働かしめる諸原因が作用する。しかも、この魂においては、力能も作用も、そのいずれの観念も存在しない。

物体と運動はしばしば思想の原因と見なされうる。

宇宙について

外界は存在しないか、少なくとも、その存在は理性的に疑われうるものである。

宇宙は心の中に存在するが、その心が存在しない。

宇宙は知覚の塊に過ぎず、実体を欠いている。

人は、宇宙のあらゆる事物が何らかの原因から生じると、自らに信じさせることができるし、そのうえ、そう信じる理由はあるが、宇宙自体がある原因から生じると信じることは、彼にとって不合理であろう。

人間の知識について

人間の知識の完成は疑わしい。

われわれはあらゆる事物を疑うべきであり、そのうえ、われわれの疑念自体も疑うべきであるから、哲学がせいぜいなしうることは、われわれに、疑わしい疑念の疑わしい解決を与えることである^{m)}。

人間知性は単独で活動し、自らを完全に転覆させるし、また、論証によって、論証によっては何も証明されえないことを証明する。

人は、知覚、行為、意志作用のすべてにおいて、単なる受動機械であるに過ぎず、彼自身の霊的な存在を有さず、他の諸事物からすっかり作り上げられているが、その存在について彼は

全く不確かである。さらに、すべての事物の本性は大部分、人に依存しているので、人間知性の活動を欠いては、二足す二は四に等しくなるはずもなく、火が熱を生み出すことも、太陽が光を生み出すこともない。

神について

《神》をどこまでも賢明で善なるものと信じることは不合理であるが、他方、宇宙には悪も無秩序も存在しない。

われわれには、ある原因から宇宙が生じると考えるのに十分な理由がない。

外界の存在は疑わしいから、われわれは、至高なるもの、あるいはその属性のどれかの存在を証明するための論証を見出せず、途方に暮れている。

われわれが、《神》さえも例外としない何らかのものの属性たる力能について語るとき、われわれは無意味な言葉を用いている。

われわれは、力能の観念も、力能を帯びたものの観念も、全く形成することができないし、〈ましてや〉無限の力能を帯びたあるものの観念を形成することもできない。そしてわれわれには、それについての観念を形成できないような何らかの対象や、何らかの対象の性質が、存在すると信じる理由がないⁿ⁾。

人間の行為の道徳性について

あらゆる人間の行為は必然的であり、現状と異なるようにはありえなかった。

道徳的、知的、身体的な諸徳は、ほとんど同種のものである——言い換えれば、正直さを欠き、知性を欠き、脚を欠くことは等しく道徳的否認の対象なのである。

人々が生活上のあらゆる利点を得るとすれば、不倫は実践されるに違いない。幅広く実践されれば、やがて恥ずべきことではなくなるだろう。密かに、そして頻繁に実践されれば、次第に、ほとんど罪ではないと考えられるように

なるだろう。

最後に、《ヒューム》氏によれば、人間の魂は各瞬間に異なるものであるから、その帰結は、ある時に彼が犯した罪を、別の時に彼に帰することはできない、というものでなければならぬ⁹⁾。

スミス博士、読者は今や、あなたの最終文の真意に思いを致す準備は完全に整っていますから、それが私の最終文にもなりましょう。

「私は《ヒューム》氏をいつも、彼の生前も没後も、人間的弱さの本性がおそらく許す限りにおいて、《完全に賢明で有徳な人間》の理念に最も近づいている人であると、考えてきました²³⁾。

完

原注

- a) 『自叙伝』[David Hume, *The life of David Hume*, Esq., London, 1777] 5ページ。
- b) 『自叙伝(他)』[Adam Smith, 'Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq.,' *The life of David Hume*] 43ページ。
- c) 『自叙伝(他)』59ページ。
- d) 『人間本性論』第一篇[1739年], 467ページ[大槻春彦訳『人性論(二)』岩波文庫, 1949年, 124~25ページ]。この『手紙』の「追伸」で、《ヒュームの》体系についての一つの見方が示されるでしょう。午後六時に『人間本性論』の著者の前に出現したものと、正確に同じものが。
- e) 『自叙伝(他)』47ページ以下を参照。
- f) 『自叙伝(他)』62ページ。
- g) 『自叙伝(他)』50ページ。
- h) 『自叙伝(他)』59ページ。
- i) 「しかしもし、私が人間の魂は不死だと信じるのが間違いだというなら、進んで間違っていたいし、喜びの源であるこの間違いを、生きている限り私からもぎ取ってもらいたくないものだ」『老年について』結び[中務哲郎訳, 岩波文庫, 2004年, 78ページ]。
- j) 『自叙伝(他)』序文。
- k) 「私は穏やかな性質の人間で、気分左右されず、

[ここでは省略されているが、ヒュームの原文では次の語句が続く——開放的、社交的、そして愉快的な気質を具え、愛着を持つことはあるが、しかし] 憎しみを覚えたことがほとんどなく、自らのあらゆる情念に関して、ずいぶんと穏健であった。文筆上の名声への愛は私にとっての支配的情念であったが、それさえも、私の気分を損ねたことは決してなかった」『自叙伝』32[・33]ページ[福鎌・齋藤訳, 150~51ページ]。しかしむしろ、牧師や尊師についての話から——《ウォーバートン》主教[William Warburton, 1698-1779], 《ハード》主教[Richard Hurd, 1720-1808], 《熱狂者》(すなわち《キリスト教徒》)についての、また、彼の著作が十分な励ましに出会わなかったために「名前を変え、フランスに定住しよう」[*The life of David Hume*, p. 20 (福鎌・齋藤訳, 146ページ)] とかつて決意したことについての——これらの事情から、言うなれば、彼の素質には〈短気な〉部分がかったように思われるのです。とはいえ、これらは些細なことです。今のところ、私の獲物はこの方向にはおりません。私はもっと大きな獲物を狙っています。この地に無神論を浸透させるといふ、身の毛のよだつ不正こそが、すべての人の関心を引く問題なのです。

- l) [新約聖書]『ヨハネ伝』第三章第三十六節。
- m) ヒューム氏の『人間知性論』[1748年初版。斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳『人間知性研究』法政大学出版局, 2004年]の第四節は、「人間知性の作用に関する懷疑の疑念」と名づけられています。第五節は、この「これらの疑念の懷疑論的解決」という題目です。
- n) たとえの中で[新約聖書『ルカによる福音書』第十五章を参照], 貧しく放蕩な〈異教徒〉は、〈この〉ような《いなご豆》[莢が食用の“husks”]を食べるところまでひどく落ちぶれました。そこまで落ちぶれた人にとって、〈分け与えられるほど十分なパンがある〉天の父親の家に戻ること——〈唯一の真なる《神》と、彼が遣わしたイエス・キリストを知る〉ことは、たいへんすばらしく、たいへん喜ばしいことに違いありません!
- o) 「私の『道徳原理論』[*Enquiry concerning the principles of morals*, London, 1751] は、[ここでは省略されているが、ヒュームによる原文では直後に次の但し書きが続く——私自身の見解では(その問題について、自分で判断を下すべきではない

のだが)』私の歴史や哲学や文芸に関する一切の著作のうちで、群を抜いて最良の著作である』『自叙伝』16ページ[福鎌・齋藤訳、145ページ]。

訳注

- 1) 『アエネーイス』第六巻268～69行(岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001年、257～58ページ)。『アエネーイス』*Aeneis*は、トロイアの陥落後、同地の英雄アエネアス(Aeneas)がイタリアに渡り、かの地にローマ建国の礎を築くまでを描く叙事詩であるが、この一節は、放浪中の彼が勇を鼓して冥界に踏み込んで行く、その最初の様を物語っている。「ディース」とはローマ神話における冥界神で、ギリシア神話のプルトンに当たる。少し後の節で、この英雄は「その顎には手入れもせぬ灰色の髭がぼうぼうと生え、その目には炎の眼球を宿し、その薄汚れた外套は肩に留め結んで掛けられている」渡し守のカロンに出会う。そして、カロンの操る舟に乗ることができるのは安らかな眠りの場所を得た者、つまり埋葬された者のみであることを知る。カロンが河岸から追いつ返す一群の人々は「救いのない、墓を持たない」者たちであった。そして河岸を追われた彼らは、百年の間、その周辺を彷徨したのち、ようやく河岸を再訪することを許されるという(岡・高橋訳、259～61ページ)。
- 2) ヒュームは、『人間知性論』の結びで、書齋に並ぶ「神学あるいはスコラ形而上学の書物のどれか」を手に取り、それが「量や数に関する何らの抽象的推論」も「事実命題や存在に関する何らの経験的推論」も含んでいないことを確認したなら、「詭弁と幻想しか含みえない」その書物を「炎に投ぜよ」と述べている。Hume, *Philosophical essays concerning human understanding*, London, 1748, p. 256 (斎藤・一ノ瀬訳、154ページ)を参照。
- 3) *The life of David Hume*, p. ivを参照。編者兼出版人のストラーンは、序文で次のように述べている。ヒュームは『自叙伝』を自らの著作集の次版に含めることを遺言で望んだが、「その版は相当期間、出版されそうもありません。編者は、一方で先行諸版の購入者のために、そして同時に公衆の好奇心の切望を満たすために、『自叙伝』だけを別に出版するのが適当と考えました」。
- 4) ヒュームの『自叙伝』は一シリング六ペンスで

販売され、タイトルページには彼の肖像画が描かれていた。

- 5) Adam Smith, *The theory of moral sentiments*, London, 1759を指すが、ホーンはここで“the theory of…”ではなく“a theory of…”と記している。スミスの学説は、あくまで道徳感情をめぐる「一論」に過ぎぬと、揶揄しているのだろう。
- 6) Hume, *op. cit.*, p. 16(福鎌・齋藤訳、145ページ)。原注oも参照のこと。
- 7) 生まれながらの人情(the milk of human kindness)については、シェイクスピア『マクベス』第一幕第五場を参照。
- 8) エイトケン近代最初のテロリストとも呼ばれる。彼はエディンバラに生まれ、同地の家屋塗装工のもとで徒弟を勤め上げたのち、ロンドンに出て強盗などの犯罪に手を染めた。新大陸に短期渡航した彼は、帰国後、アメリカ植民地独立の大義を支援するとして大ブリテンの六つの海軍工廠すべての破壊を企て、1776年秋に旅先のパリでアメリカ大陸会議使節ディーン(Silas Deane, 1737–89)と会見し、自作の発火装置を示して少額の資金援助を受けた。放火による工廠破壊計画は、同年12月にまずポーツマスで、続いて翌年1月にブリistolで実行に移され、後者は少なからぬ損害を被った。1月下旬に彼は逮捕され、送致先のロンドンで盲目の治安判事(作家ヘンリーの弟)フィールディング(John Fielding, 1721–80)の取調を受けたのち、3月6日にウィンチェスターで開かれた公判において絞首刑を宣告された。スコットランド出身で王座裁判所首席判事のマンズフィールド(William Murray, 1st Earl of Mansfield, 1705–93)が、その際に法廷弁護士の一人として出席している。刑の執行は同月10日で、見せしめの意図から、エイトケンはポーツマス海軍工廠の外に設置された船のマストに吊るし上げられた。観衆は二万人に上ったと言われる。なお、彼の罪状告白は*The life of James Aitken, commonly called John the Painter, Winchester, 1777*として活字になっている。また、パリのディーンはエイトケンとの会見を認めたが、計画への関与は否認した。Neil L. York, ‘Aitken, James [alias John the Painter] (1752–1777),’ in *ODNB*やJessica Warner, *John the Painter*, Thunder’s Mouth Press, 2004を参照。
- 9) 頭文字がBの名を持つ人物は、ビーティを指していると考えられる。先駆的な奴隷制批判でも知

られるビーティは、人間本性の善性と神による啓示を信頼する立場から、一般に『真理論』と略称される『真理の本質と不変性について』を1770年に著し、ヒューム哲学の懐疑的性格を激しく非難した。本書による信仰擁護で一定の名声を博した彼は、同年、アバディーンのカレッジから法学博士号を授与され、翌年訪問したロンドンでは、青鞥のモンタギュー夫人 (Elizabeth Montagu, 1718-1800) やジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) らの文人グループに歓待される。彼は73年に再びロンドンを訪れ、国王ジョージ三世から年金を拝領するとともに、オックスフォード大学から名誉博士号を取得したが、『真理論』刊行後の彼は、自身がヒューム支持者の攻撃的になるという、ある種の強迫観念に悩まされていたと伝えられる (Roger J. Robinson, 'Beattie, James (1735-1803)' in ODNB)。

- 10) 『第一哲学』とは、アリストテレスの『形而上学』を指すものであろう。公衆が彼から学びえたものは、ただ「自分たちが裸である」という点に尽きると辛辣に述べた上で、ホーンはキケロ批判に移るが、アリストテレスとキケロの組み合わせについては、スミスにとって「決して忘れられない」(*The correspondence of Adam Smith*, ed. E. C. Mossner and I. S. Ross, Oxford U. P., 1977, p. 308) 師であるハチスン (Francis Hutcheson, 1694-1746) が、著書『道徳哲学序説』(ラテン語版からの英訳)の序「大学生たちへ」の中で、同書における自身の道徳哲学体系の概説がキケロとアリストテレスに多くを負うことを明言した例がある。Hutcheson, *A short introduction to moral philosophy, in three books*, Glasgow, 1747, p. i (田中秀夫・津田耕一訳、京都大学学術出版会、2009年、6ページ)を参照。

- 11) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第三章には、冷たくも熱くもない、すなわち宗教的に淡白な小アジアの古代都市ラオディケア (Laodicea) のキリスト教徒に宛てて、彼らは自らを富裕で何の不足もないと考えているが、実際には哀れで貧しく、盲目で、「裸である」ことを告げ知らせる手紙を発せよ、と述べられている。

- 12) 引用は、ビーティ『真理の本質と不変性について』第三部第三章「形而上学的懐疑論の帰結」より (Beattie, *op. cit.*, pp. 499-502)。冒頭の「現代の懐疑論者」の一人として引用箇所の直前で挙げられている名は、ヒュームではなくパークリ (George

Berkeley, 1685-1753) である。そこには次のように書かれている。「彼らは自分の教義を自分でも信じておらず、名声と富を得る手段としてそれらを出版しているだけなのかもしれない。だが、私はそれが事実だと思いたくない。神はそれをお許しになるまい。そうだとすれば、彼らの罪の大きさは筆舌に尽くしがたいほどのものである。私たちはただそれをじっと見つめ、震えおののくばかりだろう。そのような不正に比べれば、盗み、強奪、放火の罪はほとんど消え入らなばかりとなる。後者は同胞の富や命を自らの必要ないし乱暴な欲求の犠牲にするが、前者は、現在と将来における全人類の幸福を、自らの強欲ないし虚栄心の犠牲にするほどの危険を冒すだろう。いやだめだ、そのような想定はできない。どれだけ墮落しようとも、人間の心はそのような悪魔的な悪性にはなりえないのだ。——おそらく彼らは、自分たちの学説の諸帰結を見通していないのであろう。パークリがそうしていなかったのは、誰よりも確かである。——しかし、パークリは彼の国の宗教を攻撃しなかったばかりか、徳の基礎を掘り崩そうともせず、無神論を説いたり奨めたりもしなかった。彼は過ちを犯した。だが、過ちを犯さぬ者などいようか。彼の意図は非難しえないものであった。そして一人の人間としての、また一人のキリスト教徒としての彼の行動は、[善なる]人間本性に対して敬意を表するものだったのである」(p. 499)。

- 13) もちろんスミスは、ビーティの『真理論』を読んでいたであろう。スミスは1775年5月9日にロンドンからヒュームに宛てた手紙の中で、彼を含む同地のヒュームの友たちはプリーストリ (Joseph Priestley, 1733-1804) が『真理論』に反論するのを見て気を晴らしたことが、彼らはビーティが再反論すると期待していたが、マンズフィールドによって主教に推されたハード (原注kを参照) が「真理の不変性のような非常に優れた著作に弁護はいらない」とビーティに助言したに相違なく、そのために反論はなされなかったことを、伝えている。「そのせいで、私たちは実に類稀な論争を逃したのです」(*The correspondence of Adam Smith*, p. 182)。この年の12月1日、スミスはジョンソンの文学クラブに初めて出席しているが (Ross, *op. cit.*, p. 251。篠原・只腰・松原訳、286ページ)、ビーティは1771年以降、ジョンソンやその周辺と親しく交流していたから (訳注9を参照)、クラブの席で『真

理論』が話題の中心となり、スミスがつねづね折り合いの悪いジョンソンと口論したこともあったかもしれない。

- 14) 『ヨハネの黙示録』第十一章には、第七の天使が最後にらっぱを吹くと、天から大声が発せられ、この世の諸国は神の諸国となり、神によって永遠に支配されるであろうと語られた、とある。
- 15) 旧約聖書『サムエル記(上)』第五章には、ベリシテ人が、彼らに敵対するイスラエル人から奪った神の箱を自分たちの崇拜するダゴン神の像の傍に置いたところ、箱を前にして像が倒壊し、頭と両手が離れて胴体だけになったと記されている。
- 16) ホーンは『ヨハネの黙示録』の叙述を暗示しながら、このように述べていると考えられる(訳注11と14も参照)。『ヨハネの黙示録』では、地上の都「バビロン」がついに滅び(第十八章)、地上の獣すなわち悪魔が捕えられた後(第十九章)、千年王国による支配が始まるとされており(第二十章)、1755年11月に発生した「リスボンを破壊した地震」をこの書の粹組の中で捉えるならば、それは千年王国到来を前に、悪魔に従った人間たちを滅ぼすため、神の怒りによって幾度か地上を揺さぶるとされる地震の一つに、数えられることになるだろう。ともかくそれは、ホーン自身の名乗る「キリスト教徒」としては、神との関係において深刻に受け止められるべきものであった。

スミスは『道徳感情論』第二版(1761年)以降の諸版において、中国で地震が起きたと仮定した場合、ヨーロッパの、中国と何の関係も持たない人道的人間は、その報を伝え聞いて一時的な悲しみの感情に捉われはしても、ほどなく地震など起こらなかったかのように再び自分の日常生活を楽しむようになるであろうと述べ、「一億の同胞の破壊」以上に「つまらない自分自身の不運」を、例えば明日切り取られることになっている「自分の小指」のほうを気にするのが人間である、とした(*The theory of moral sentiments*, 2nd ed., London, 1761, pp. 211-12. 水田洋訳(上)、岩波文庫、2003年、313ページ)。かねてより指摘されてきたように、スミスは前記のリスボン地震を念頭に置いて、このように述べたとも考えられる。しかし、この叙述は、そのようにあさましく利己的なわれわれ人間をして、それでもしばしば寛容かつ高潔に活動させる諸原理はいったいどこからくるか、という問いに対する答えを導く過程において提示され

ている例である。問いに対するスミスの答えは、それは人情からでも仁愛からでもなく、より強力な、人間が経験的に獲得してその胸中に住まわせたところの、自身の行動を規制する裁判官、すなわち「公平な観察者」の目を意識するところからくる、というものであった。「隣人愛でも人類愛でもないものが、多くの場合に、われわれをしてそうした神聖な諸徳の実践に向かわせる」(*Ibid.*, pp. 213-4. 水田訳(上)、314~15ページ)。

スミスにとっての神は、互いに独立の原則を有する自然と人間の「双方が、同一の偉大なる目的、すなわち世界秩序と人間本性の完成ならびに幸福とを促進するように仕向けられている」点に存在の根拠を占めているから、彼が「詩人たちの神々」と呼ぶような、人間の主観に肩入れし、「異常な手段をもって」自然の成り行きに積極的に介入するような神ではないが(*Ibid.*, p. 242. 水田訳(上)、352~53ページ)、それは不信心者であることと同義ではなく、虚無主義的な姿勢からも程遠い。

- 17) 旧約聖書『出エジプト記』第十四章によれば、モーセ率いるイスラエルの民を追って紅海に突入したエジプト王パロの軍勢は大波にのまれ、海中に沈んだ。
- 18) 「知らぬが幸せなれば、知るは愚かなり」“where ignorance is bliss, 'Tis folly to be wise”の結びで知られる、グレイ(Thomas Gray, 1716-71)『イートン校遠望頌歌』*An ode on a distant prospect of Eton College*, London, 1747に見られる一節。この一節は、次に訳出した第八連の末尾に見出される。「それは野心を惹起し、哀れな奴を高所からぐりりと回し投げして、苦々しい嘲弄の犠牲者になってしまうのだ、非行を笑いながら。学生は過ちの刺激を試すだろう、そして無情なる冷酷さが目つきを変え、その目は流れ出ようとする涙を軽侮するだろう。汚れた血をめぐる激しい自責の念と、最も厳しい災禍の只中で笑い声を上げる、気紛れな狂気」(p. 7)。この『頌歌』は、後年にグレイ自身が編んだ『詩集』*Poems by Mr. Gray*, London, 1768に再録されたが、『詩集』収録分には「気紛れな狂気」の箇所には註が付され(*Poems*, p. 24)、ドライデン(John Dryden, 1631-1700)『古代近代寓話集』*Fables ancient and modern*, London, 1700中の一句「憤った気分で笑い声を上げる、狂気」(*Fables*, p. 46)の参照指示がある。

なお、微細な点だが、*The poetical works of*

Thomas Gray, LL. B. late professor of modern languages and history in the university of Cambridge, ed. S. Jones, 2nd ed., London, 1800の編者注によれば (pp. 15-16), 『頌歌』全体が『釣魚大全』で知られるウォルトン (Izaak Walton, 1593-1683) の『ウォットン伝』*The life of Sir Henry Wotton*, 1651の結び近くの一節を想起しながら書かれている。また、ホーンが『頌歌』から引いた一節と『手紙』冒頭に掲げられたウェルギリウスからの一節 (訳注1を参照) は無縁ではない。*The poems of Thomas Gray, William Collins, Oliver Goldsmith*, ed. R. Lonsdale, Longmans, 1969の編者注によれば (p. 60), 『頌歌』の第七連から第九連まではウェルギリウス『アエネーイス』第六巻273~81行に着想を得たものだが、これは『手紙』冒頭の一節の直前の箇所当たっている。福原麟太郎『トマス・グレイ研究』研究社, 1969年も参照。ウォルトンについては以下の訳注21を参照されたい。

スミスは、『修辞学・文学講義』第二十一講 (1763年1月14日) で、グレイの『イートン校遠望頌歌』と『墓畔の挽歌』*Elegy written in a country churchyard*, London, 1751がともに「普段の心の状態からほとんど離れていない頌歌や挽歌」の例で、それらは「われわれを最も楽しませる」と語った (*Lectures on rhetoric and belles lettres*, ed. J. C. Bryce, Oxford U. P., 1983, p. 127. 水田洋・松原慶子訳『修辞学・文学講義』名古屋大学出版会, 2004年, 219ページ)。また、1780年にスミスと会見したアミクス (筆名) という人物は、スミスがビーティの『吟遊詩人』*The minstrel*, 2 vols., London, 1771-74を酷評する一方, 「[サミュエル・] ジョンスンがあれば十分なグレイの頌歌の数々を、抒情的卓越の典型として挙げた」ことを伝えている (*Lectures on rhetoric and belles lettres*, p. 230. 水田・松原訳, 348ページ)。ジョンスンのグレイ評はSamuel Johnson, *The lives of the most eminent English poets*, 4 vols, London, 1781に見られる。さらにスミスは、『道徳感情論』第六版 (1790年) に新しく追加した叙述の中で、グレイについて「ミルトン [John Milton, 1608-74] の崇高にポーブ [Alexander Pope, 1688-1744] の優雅と調和を接合した人物で、もっと書くべきであったという点を除けば、彼を英語圏随一の詩人とするに不足はないであろう」と評した (*The theory of moral sentiments*, ed.

Raphael and Macfie, Oxford U. P., 1976, pp. 123-24. 水田訳 (上), 395ページ)。

- 19) フッカーの大著『教会組織の諸法』*Of the laws of ecclesiastical polity*, 8 vols, Londonは、1593年に第一巻から第四巻, 97年に第五巻, 著者没後の1648年, つまり内乱期に第六巻と第八巻, そして王政復古後の61年に第七巻が公にされ, 半世紀以上の年月をかけて全八巻の刊行をみた。
- 20) 『ルカによる福音書』第十六章を参照。生前に豊かな暮らしをしたある富者は、黄泉の世界で苦しみを受け、逆に極貧生活を送ったラザロは、死と同時に天上のアブラハムの懷に迎え入れられた。
- 21) 引用は、ウォルトン著『教会組織の諸法という学識豊かな書物の著者リチャード・フッカー氏の生涯』*The life of Mr. Rich. Hooker, the author of those learned books of the laws of ecclesiastical polity*, London, 1665から。この伝記については、『フッカー著作集』*The works of Mr. Richard Hooker*, London, 1666に収録された改訂版 (第二版) が、18世紀後半に至るまで幾度か増刷されている。ホーンはこの改訂版から引用を行ったと考えられるが、その際、彼の創作によると思われる語句の補足を施している。「私の誠実さが」から「戻らぬ影のように」までの三文と、「今や彼は、アブラハムの懷に抱かれたラザロのごとく横たわっているように思える」の一文である。

ウォルトンは、トマス・ホプズも所属していたことで知られるグレート・テウ・サークル (Great Tew circle) を介して知り合って以来の友人であった。当時のウィンチェスター主教モーリ (George Morley, c. 1598-1684) の勧めを受けて、上の『フッカー伝』を著した。ウォルトンの先妻の母がフッカー家と親密に交際していた家の出であったことから、間接的なながらも、彼はフッカーの臨終の様子を詳しく知ることができたようである (Jessica Martin, 'Walton, Izzak (1593-1683),' in ODNB)。『フッカー伝』によれば、1600年、ロンドンとグレーヴゼンド (Gravesend) を行き来した際に引いた風邪がもとでフッカーは大病を患い、二度と回復しなかったが、病床でも自らの研究の完遂にこだわり、親しい友人の「サラヴィア博士」 (Adrian Saravia, 1532-1613) に対し、しばしば「他の理由は無いが、生きて『組織』の残り三巻を仕上げるためだけに、神に長命を願う」と語ったとされる (Hooker, *The works*, p. 25)。人生の最期に

国教会の繁栄を望み、その望みを病床で親友サラヴィアに語った信仰者フッカーの肖像と、国教会の崩壊を望み、その望みを病床で親友スミスに語った不信心者ヒュームの肖像とを、引き比べよということであろうか。

22) 第二版(1777年)以降の諸版には、この箇所に次のような注が付されている。「ビーティ博士の『真理論』第二部第一章第一節および第三部第二章を見よ」。

23) Smith, 'Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq.,' *The life of David Hume, Esq.*, p. 62 [福鎌・齋藤訳, 138ページ]。スミスによる一文は、プラトンの対話篇『パイドン』にお

けるソクラテスへの讃辞を脚色したものであることが、ロスによって指摘されている (Ross, *op. cit.*, p. 339. 篠原・只腰・松原訳, 390ページ)。

付記

本稿の一部は、近代思想研究会第32回例会(慶應義塾大学, 2010年6月5日)ならびに「啓蒙と経済学」研究会(キャンパスプラザ京都, 2010年7月24日)において発表された。その際に賜った貴重なご教示に対し、この場を借りて感謝申し上げる。